

2011年6月26日 礼拝メッセージ

聖書箇所：ルカの福音書3章21～38節

説教題：ヨセフの子イエス

1 バプテスマを受けられるイエス

今日の箇所では二つのポイントについて考えて参ります。一つは、なぜイエスは水でバプテスマを受けられたのか。二つ目は、23節以降に記されている系図にどのような意味があるのか。この二つについてです。

前回、水によるバプテスマと聖霊によるバプテスマの違いについて触れました。ヨハネは水でバプテスマを授けていました。でもだれもがわかるように、水でからだを洗ったからと言って罪が消えるわけではありません。そうであれば、何もわざわざ水によるバプテスマを受ける必要がないように見えます。それなのに私たちは、受洗の時は水の中からだを沈め、水によるバプテスマを大切にしています。教会によっては、水の中に入らずに、「滴礼」と言って、服を着たままの状態ですから水を振りかける方法をとる場合もあります。形の違いはありますが、いずれにしても洗礼は水で行うということにこだわります。

なぜそこまでこだわるのでしょうか。その理由は何か。それを考えるために、マタイの福音書を開きます。そこに詳しく事情が書かれています。マタイの福音書3章14、15節を読みます。「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか。」ところが、イエスは答えて言われた。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」そこでヨハネは承知した。」

ヨハネはイエスを見た時、すぐにわかりました。この方は水でバプテスマを受ける必要のない聖いお方だ。それなのに、イエスが自分のところに来て、洗礼を授けてくれないだろうかと言われたのですから、驚き、とまどいました。なぜ、イエスが水でバプテスマを受けようとされるのか。イエスはこう語っています。「水でバプテスマを受けることは正しいことだ。」どれくらい正しいかと言えば、たとえ神の子であり、罪のない方であっても受けなければならないくらい、正しいこと。

しかしそうは言われても、罪がない方なのにどうしてわざわざ水に入られるのか、なお私たちにはなお釈然としません。もう少し説明が必要です。

もう少し細かく見ましょう。「すべての正しいことを実行することは、わたしたちにふさわしいのです。」よく注意して読んでください。何と書いていますか。イエスは「わたしにはふさわしい」とは言いません。その代わりに、「わたしたちにふさわしい」と語っておられます。イエスが神の子なので、私たち人間とまったく違う世界に生きておられるはずでした。そのような方が、私たちといっしょの姿をとってくださろうとするとき、「わたしにはふさわしい」とは言わずに、「わたしたちにはふさわしい」と言われる。罪のない方であるのに、罪ある私たちと同じ立場に立つてくださる。そのような姿勢は、イエスが歩み出される最初の日からもう始まっていたのです。

なぜ、私たちが水によるバプテスマにこだ

わり続けるのか。「このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」このみことばから、イエスが罪人である私たちと同じ姿をとってくださることにこだわり続けていたことがわかります。そればかりではありません。イエスはここから十字架に向かわれたのです。この後で見ると大変な苦しみに向かわれる旅でした。十字架に向かおうとされた時、イエスがまず水によるバプテスマを受けられた。これらのことを覚えて私たちは水によるバプテスマを大切にします。

2 祈るイエス

さて、イエスは水から上がられた後、祈られと書かれています。何を祈っておられたのかは説明がありません。これから始まる十字架への道について祈っておられたのは確かです。

罪のない方が十字架でさばきを受けられます。どんなさばきでしょうか。まず十字架につける前に鞭で打たれ、いばらの冠をかぶせられる。そして、十字架に釘で打たれ、裸にされ、つるされる。それだけでも十分にさばきとして苦しいことですが、イエスが考えておられることはその事だけではありません。イエスにとってさばきのなかでも最も耐え難いことは何なのか。その苦しみを思い起こしているからこそ、イエスはここで祈られているのではないですか。その苦しみとはどのようなものでしょう。

イエスが十字架で叫ばれた声を皆さんは覚えておられるはず。「エリ、エリ、サバクタニ。わが神、わが神。どうしてもわたしをお見捨てになつたのですか。」

神のひとり子であるイエスにとって、最も

つらいことは何か。父なる神から見捨てられていくことなのです。今、その十字架に向かう旅が始まりました。そのつらさを覚えると、どうしても祈らざるを得ません。では、このイエスの祈りはどのように応えられていったか。その事を次に見ます。

3 聖霊と父なる神

21、22節を読みします。「さて、民衆がみずなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に降られるのをご覧になった。また、天から声がした。『あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。』」

皆さんもご存じのように、天と地を造られた神は唯一の神であって、ただお一人しかおりません。しかし、私たちの目には神である方が全く異なる三つの存在として見えてきます。難しい神学用語では「三位一体の神」と表現します。難しい言葉をあてなければならぬくらい、わかりにくいということでもあります。その三位一体の神である方のすべてがここに現れてくださいます。地上には祈っておられるひとり子の神がおられます。そこへ天が開けて、聖霊が鳩のような形をして降られます。そして最後に、父なる神が声をかけてくださいます。聖書には神のことがいろいろと書かれています。それでも、変な言い方になりますが、三位一体の神が全員揃う場面は非常にまれです。別の言い方をすれば、三位一体の神が揃って姿と声を現さなければならぬほど、神のひとり子が向かわれる十字架が苦しみに満ちていたとも言えるでしょう。

聖霊はイエスの上にとどまることにより、

常にイエスを励ましていかれます。イエスはこれから行く先々で奇蹟を起こし、力あるみわざを行い、福音を語っていきます。聖書にはいちいち聖霊の助けがあったのだとは書かれていません。あたかもイエスお一人がすべてのことを成し遂げたかのように書かれています。そうではありません。実はいつの時もイエスのかたわらに聖霊なる方がいて、イエスを励ましておられたことを忘れてはなりません。

イエスを励まそうとしたのは、聖霊だけではありません。父なる神はこのように言われました。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」短いことばではあるけれど、イエスにとってこれ以上のない励ましのことばでした。イエスはこれから十字架で父なる神に捨てられようとしています。父なる神の愛から切り離されていく歩みへと向かおうとしています。私たちには、それがどれだけ大変な苦しみなのか、おそらくびんと来ていません。ただ何となく、「大変なのだろう」「つらかったのだろう」ということしかわかりません。というのは、私たちは生まれた時から罪を抱えておりましたから、愛する者から切り離されることのつらさが十分にわからないのです。罪のない方が、罪ある者とされることの悲しみがよくわからないままかもしれません。

それでも、私たちはこのことを考えたいと思います。父なる神の愛するひとり子が、これから十字架に向かう旅へと出発しようとしています。出発に際して、イエスは祈られました。父なる神にもイエスの苦しみが伝わっています。そこで父なる神はこのように声をかけます。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

父なる神はこのときどのようなことを思っておられたのか、わたしは次のように考えるのです。

『あなた（子なるキリスト）は人類の罪を背負い、さばきを受ける者となって、十字架に向かおうとしている。わたし（父なる神）はその十字架であなたを完全にさばかなければならない。あなたを見捨てることこそが、完全なさばきということだから。それゆえ、あなたが十字架につくとき、わたしは何もしない。何も声をかけない。奇蹟は起こらない。すべては人々の目には悲惨な状態のままに進み、あなたは十字架で死ぬことになる。』

でも、あなたは決して見捨てられたのではない。あなたが十字架で苦しむとき、わたしはあなたのことを完全に覚えている。わたしはあなたのことを永遠の昔から喜んできたのだから。あなたはわたしのひとり子なのだから。あなたは十字架で死ぬことになるけれど、絶対にそれでは終わらない。あなたは死ぬ。しかし、あなたは滅びることはない。あなたのことをわたしは覚え続ける。あなたを死からよみがえらせる。わたしはあなたの信仰に必ず応える。わたしにゆだねなさい。わたしがすべてのことを成し遂げるのだから。』

イエスは、父なる神が天から語られたことばを励ましとして十字架に向かっていきます。

4 アダムにまでさかのぼる

さて、今日の箇所で多くの方が引っかけりを覚えるのは、23節から38節まで延々と続く、系図のことでしょう。注意すれば、このうちの何人かの名前は記憶にあります。他の人たちは全く知らない。こんな系図のどこ

に恵みがあるのか。時間のむだだから、ここは省略して次に進もう。そう思いたくなります。

しかし聖書にはむだなことばは一つも書かれていません。一字一句が大切な意味を持つ。であるなら、この系図にも大切な意味が込められているはずですから、飛ばさずに考えてみます。

考える糸口は、最後のことばです。「このアダムは、神の子である。」確かにアダムは神の手によって造られたのですから、「神の子」かも知れません。けれどもアダムが何をしたのか、私たちは知っています。人類に罪を持ち込み、アダムのゆえに私たちは全員生まれながらに罪ある者となってしまいました。

イエスは、公生涯を始めるまでは、ヨセフの子であると思われていました。もちろんイエスは聖霊によって母マリヤからお生まれになったのですから、ヨセフとは血のつながりはありません。それなのに、わざわざヨセフから始まり、アダムに至る系図を載せます。

どうしてだと思いませんか。自分の先祖のことを大切にされる方は、業者に頼んで家系図を作らせることがあるそうです。調べていくと、確かにすばらしい業績を残した先祖がいます。しかし中にはそうでない者もいます。犯罪者であったり、障害者であったり、あるいは側室に産ませた子どもとか、複雑な人間関係があったりする。そういう人はどうするか。家系図に載せない。だから家系図と言えば、どこに行っても立派な人たちの名前しか書かれていない。中には、本当かどうか怪しいのに、自分は〇〇天皇の末裔であるかのような家系図を作る、それが普通なのだそうです。

ところが、ここにある聖書の系図はどうか。ひとことで言えば、恥ずかしい系図です。イエスの先祖をたどっていったら、だれにさかのぼるか。なんとあの罪を犯したアダムにさかのぼる。イエスは、アダムの子孫として、罪ある者を先祖として、私たちのところに来られた。そのことを公にしています。隠そうとしません。いや、むしろその事をはっきりと公に示します。

どうしてこんな系図なのでしょう。二つの意味があります。イエスは水によるバプテスマにこだわり、罪人と同じ姿になろうとされました。ここでも、系図によって、この方が罪ある私たちとどこまでもいっしょにいたいと願っていることを表そうとしているのです。

そしてもう一つ大切なメッセージが込められています。もしイエスが、死んだ者のことを救うことがおできにならないのなら、こんな系図は書くことはできません。イエスが、死んだ者たちを救うことがおできになるからこそ、系図を載せるのです。イエスはアダムから始まるこの人たちの真ん中を通してきてくださっているのです。

であれば、これは私たちにも大きな希望です。すでに亡くなった家族や親戚、友人、知人がいます。その人たちの救いのことが気がかりです。私たちにはどうすることもできない。けれども主キリストにはそうではない。アダムにまでさかのぼることができるお方なのです。

主がどこを歩いて来られたのか、どこから始められたのか。いくつかのことを見てきました。大きな恵みがここにあることを今朝覚えたいと願います。